

語り合う文学教育の会

2013年度 No.5 9月3日・文責 橋本博孝

原田さんからおたより

奈良例会・織田さんの実践報告「生き物はつながりの中に」

三重例会・庄司さんの実践報告「スーホの白い馬」

これからの予定（9月21日の三重例会は中止します）

会費納入者85名（8月末）

三重・41名 奈良・22名 全国・22名

目標の100名まで、あと15名ですが、今年度も（毎年夏休みまでです）、ここでいったん会員以外への会報の郵送をやめます。会員でない方への例会案内は、みなさんの口コミがたよりになります。職場のみなさんや知り合い友だちに一声かけてください。

会報の前号では簡単にしか紹介できなかった実践報告を、原田さんご自身がふりかえってくれました。

子どもはどう読みましたか？ 原田 聡子

5月の例会では、自分の中ですっきりと納得がいかず、準備がおくれ、遅刻までして、参加していただいた皆様にたいへん失礼なことをしてしまいました。そんな中途半端なレポートなのに、司会の先生は、とても丁寧に発表を促してくださいました。そんなこ

んなで文学を投げだしかけていた気持ちが少しばかりすっきりしました。

さて、今回の例会で私が得たものは、次の2つのことです。

1つ目は、「やはり、私は子どもとともに読もう」ということ。2つ目は、「ファンタジーにはファンタジーの読み方がある」ということです。

★やはり、子どもとともに読もう★

私のもやもやは、自分が文学とは何かさっぱり分かっていなかったのではないかと思えてきたことに始まりました。いつも子どもたちの読みの力を借りて物語を読んでいるのは、すごく怠慢なことなのではないかと思えてきたのです。そこで、今回、子どもの読みを封印して、真面目に逃げずに自分自身で読んだことを書いてみようと思ったのです。

そこで、私は、実践レポートではなく、学生の教材研究レポートのようなものを書こうとしてみました。そのレポートは、結局形にならず、自分でも自分に「不可」を出すような惨憺たる結果になりました。その支離滅裂なレポートを話し終えたとき、橋本先生は、あたりまえのように淡々と、

「それで、子どもはどう読みましたか。」

と聞いてくださいました。

その時、自分の中のもやもやの本当の理由が分かりました。それは、この教材を昨年度担任した子ども達と心ゆくまで読めなかったことだったのです。橋本先生の一言で、私は、我に返りました。子どもたちの声を聴くことは何より大切なことだったのにと、恥ずかしくなりました。

「やっぱり、子どもといっしょに読もう。自分が正解をまず見ようなどとはするまい。」

と私は思いました。その場で、集まった先生方と「初雪の降る日」を読むと、自分ひとりの考えがいかにか狭いか分かりました。そして、藤原先生の読みを聴いていると、先生の根っこに確かな文学の力があるのだと感じます。もっともっと話を聴きたいと思えます。

「子どもたちに何を教えたいのか。」

教育の場である以上、それは確かなものであるべきなのでしょう。しかし、私は、いつも、

「子どもたちは、何を学びとるだろう。何を引き出してくるだろう。」

と考えながら授業をしています。そして、

「すごいね。あなたは、今、こんなことに気づいて、こんなすごいことを言っているよ。みんなもそれを聴いて感心しているよ。そして、あなたの話したことを受けて、みんなこんなことを今日学ぶことができたよ。」

ということの続く教室を目指しています。「こんなすごいこと」は、その場で子どもと教材文との、また、子どもどうしの化学反応で生まれるものであって、了見の狭い私の頭から生まれるものではありません。学ぶ道筋を示し、真剣に文章を読む楽しさを体感させれば、子どもたちが、動き始めることは、これまでともに学んだ子どもたちが示してくれました。

もうかれこれ、10年近くこの会にいて、今頃こんなことに迷って堂々巡りをしているわけですが、仕方がありません。誰しも、自分に見えるものしか見えませんし、見ようとするものしか見えません。私は所詮、私でした。

なるべく例会を休むことなく学び続け、もうちょっとばかり自分に自信をもって、子どもたちに教えた「価値的な学習課題」はこれだ！と言える金棒を手に入れたいものです。今のところ、私自身の価値観や思想が常に揺れ動いていることが、何を読んでも確信のもてない理由なのでしょう。

★ファンタジーには、ファンタジーの読み方がある★

私のレポートが「不可」になりさがった理由を、藤原先生が見出しのように解説してくださいました。

私は、『語り合う文学教育—子どもの中に文学が生まれる—』（藤原和好・p86）の【教材分析の手順】にそって「初雪のふる日」を読もうとしたのです。藤原先生によれば、それは、この会ができた当初多くとりあげたリアリズムをもとにした文学の読み方であって、ファンタジーは、それでは読めないということでした。

「ファンタジーの読み方をまとめなくちゃいけないな」と藤原先生はおっしゃったので、楽しみに待っています。

田中実先生の「第3項」は、まだよくわかりませんが、神奈川の青木先生が、会報によせられた文の中の「神」であるとか、藤原先生がまどみちおさんの詩で例に出された「宇宙の目」が、やはり、文学作品の底には流れているのだらうと思います。

小学生の頃から、一人の人間の書いた「こうすれば物事うまくいくよ」というノウハウ本には、いつも疑問をもちました。文学は、その時々を読み手に違う顔を見せます。いつまでも不肖の会員ですが、「子どもの中に文学を見いだす仕事」を今年も続けたいと思います。

今年も元気いっぱいの4年生22人と教室ですごせる幸せな一年がはじまりました。

転勤したばかりの学校の校区は、昭和の雰囲気が残っています。

「4年生の畑、なすがおっきなってきたので、とってってえな。」

と地域の方から教頭に電話が入ります。河口で魚がはね、何種類もの野鳥たちが海沿いの堤防まで見渡せる広い田園の上で悠々とえさを得て生活しています。子どもたちは、なかなかワイルドでピュアな自然児ぞろいです。学力は、学校次第という感じです。

12月に校内研修の授業をすることになりました。「初雪の降る日」をやってみようかなと考えています。

わたしたちの方こそ、原田さんのこの姿勢に学ばなければなりません。原田さんをはじめ、それぞれの教室で子どもたちと真摯に謙虚に向き合う会員のみなさんが、語り合う会を作っているのだとあらためて思いました。ありがとうございます。

例会の報告

☆6月16日(土) 奈良例会 午後2時半～ 奈良教育大学附属小学校
織田萌子さんの実践報告「生き物はつながりの中に」 8名参加

光村6年の教材です。光村教科書の特徴の一つとして、二つの教材が同じ目標の下に並べられているということがあります。この教材も「感情」(茂木健一郎)と一緒に「文章と対話しながら読み、自分の考えを持とう」という单元になっています。「感情」は短い(2ページ)し、脚注的な呼びかけがいっぱいあるので、これに沿って話し合えばいいようになっています。その経験を使って、「生き物はつながりの中に」を読む、つまり、「対話的に読む」とはどうすることかを「感情」でやってみて、それを生かせばいいというように組み立てられています。

ですから、これは守田先生がいつも言われていることですが、段落分けと要約の説明文の授業から抜け出すのにいい教材構成だと思います。

もう一つ、織田さんのとりくみを聞いていて考えたことがあります。

生き物は、外の世界とつながり、一つの個体としてつながり、長い時間の中で過去の生き物たちとつながるというように、さまざまにつながりの中で生きていることが分かりました。

という文があります。

筆者(中村桂子)自身が、ここまでの論述をまとめています。これも守田先生が言われるように、筆者以上のまとめはできないわけですから、ここでも段落分けと要約は否定されることになります。このまとめを受けて、「あなた」はどう考えるかという呼びかけが、筆者から読み手になされるというのが、この文章の特徴です。読み手は、対話を呼びかけられているのです。

考えたいのは、この筆者のまとめです。まとめだけでなく具体的に述べているところでも同じです。筆者は、生き物の特徴を3つ挙げ、いずれも「つながる」という言葉で

表現しています。

外から食べ物を取り入れ、自分の体の一部とする（つくりかえる）→ 外とつながる

赤ちゃんから今まで変化成長してきて、あなたはあなた → 一つの個体としてつながる

両親・祖父母がいて、あなたがいて → 過去や未来の生き物とつながる

このようにまったく異なることがらを、いずれも「つながる」と言っています。この言葉の使い方（修辞・レトリック）にこそ、筆者の主張があるのでしょう。わたしが気になったのは、それが読み手に受け止められるだろうか、ということです。

子どもたちの感想を見ると、他の先生方の実践でもそうですが、最後の「つながる」にふれたものが圧倒的に多いようです。お母さんがいて、おばあちゃんがいて、曾おばあちゃんがいて…、みんないたからわたしがいて、というのが一番実感しやすいからでしょう。

筆者は読み手への呼びかけのところで、もう一度この3つをくりかえしています。

あなたは、今日もあなたであり、明日もあなたであり続ける、たった一つのかげがえのない存在です。と同時に、あなたは過去のすべてとつながり、未来へもつながっていく存在なのです。また、地球上の他の生き物ともつながっています。

自己の同一性については「つながる」を使っていません。第二文は、ここだけ切り取るとそのことを含んでいるようですが、文脈全体では違います。

地球上の他の生き物とのつながりは、広く言えばわたしたちが呼吸している酸素も植物が作り出したものですが、狭く食料という意味で考えると、実際は「食べる⇔食べられる」の関係です。

わたしは、織田さんのとりくみを聞きながら、次の授業の機会では、この質の異なる

3つの関係を「つながる」と考えられるかどうか、子どもたちに聞いてみたいと思いました。

来年度6年生を担任される方、お願いします。

☆6月22日(土) 三重例会 午後2時半～ 三重大学教育学部
庄司たづ子さんの実践報告「スーホの白い馬」 14名参加

光村二年下の教材です。挿絵が変わってしまいました。わたしには赤羽末吉の絵がなつかしく思えます。20世紀のことになってしまいましたが、馬頭琴を求めて内モンゴルに行った時、赤羽さんはここに来てスケッチしたのではないかと感じたものです。

庄司さんは「スーホの白い馬」の「の」にこだわって読んでみたいと考えたそうです。「スーホと白い馬」ではないからです。

スーホと白い馬の物語の中では「スーホの白い馬」ですが、馬頭琴の由来を語る物語全体では、「スーホの馬頭琴」が「みんなの馬頭琴」になっていきます。あんまり逐語的に解釈していくと全体を見失いそうですが、そこはこのように語られています。

かなしさとくやしさと、スーホはいくばんもねむれませんでした。

(夢に白馬が出てきて、馬頭琴の作り方を教えます)

それをひくたびに、スーホは、白馬をころされたくやしさを、白馬にのって草原を駆け回った楽しさを思い出しました。

(そんな時、音色はますます美しく響きました)

ひつじかいたちは、夕方になると、よりあつまって、そのうつくしい音色に耳をすまし、一日のつかれをわすれるのでした。

スーホの馬頭琴がみんなの馬頭琴になっていく過程がよく分かれると、わたしは思いま

す。白馬を殺されたくやしきだけをいつまでも抱いていたのでは、馬頭琴は悲しみの楽器になります。物語は復讐譚としてしか完結しえません。スーホは殿さまへの恨みを忘れたのではないでしょうが、くやしきは、そのような悲劇のない、草原を自由に駆け回れる暮らしを求める思いとなり、その思いを一人ひとりの牧人が受けとめたからこそ、明日も働こうとみんなが思えるのでしょう。

内モンゴルで買ってきた馬頭琴などは、まだわたしが持っています。壊れて鳴らなくなりましたが、授業で使いたい方は、どうぞ。

以上の実践の詳細は別の機会！

☆7月 6日(土) 三重例会 午後2時半～ 三重大学教育学部
中西祐司さんの実践報告『鳥獣戯画』を読む 9名参加

★8月10日(土)・11日(日) 日本文学協会国語教育部会夏期研究集会・東京
横山先生が開会のあいさつをされました。憲法の危機と子どもたちの今とをつなぐ構えの大きなごあいさつに感銘を受けました。

小学校分科会では、中西祐司さんが「生きる」の実践報告をしました。子どもたちの生きた声が聞こえると好評でした。

☆8月17日(土) 18日(日) 語り合う会夏期合宿研
三重志摩市阿児アリーナ のべ19名参加

横山先生の講演「何に着目し、どこへ向かって読んでいくのか —『花はどこへ行った』—」と福井麻子さんの実践報告「百年後のふるさとを守る」(河田恵昭・光村5年)が1日目の内容でした。2日目は、中垣清人さんの「わたしの日記・作文教育」というお話を聞きました。

初日16名、二日目13名、のべ19名の参加でした。レポートはあと10部ほどわたしが預かっています。入用の方はおっしゃって下さい。

これからの予定

☆9月 7日（土）奈良例会 午後2時半～ 奈良教育大学附属小学校

※お知らせが開会に間に合いませんでした。すみません。奈良の方には別にすでに案内をしています。

☆10月19日（土）三重例会 午後2時半～ 三重大学教育学部国語科ゼミ室

★11月2・3日 近畿東海教育研究サークル合同研究集会（和歌山）

★11月16日（土）奈良教育大付小研究会「教材の価値となかまとの学び合い」

『モチモチの木』と『アレクサンダとぜんまいねずみ』の授業があります。

*9月21日（土）に予定していた三重例会は都合により中止します。